（別紙２）

論 文 審 査 の 結 果 の 要 旨

氏名　三村　竜之

現代デンマーク語の単語レベルで観察される韻律現象の全体的な解明を目指した本論文は，主要なテーマごとに章立てがなされている。以下，章ごとに特徴をまとめ，最後に全体の評価を行なう。

導入部の第１章に続く第２章では音節構造を分析する。特に注目されるのは音節境界を設定する規則で，強勢のある音節は重音節でなければならないという音節量の観点と，音節頭部の子音を最大限にするという「最大頭子音の原理」を提唱した点である。

第３章は強勢（ストレスアクセント）を扱う。強勢のレベルをいくつ認めるべきかという課題では，主強勢のみが音韻論的に意味があり，副次強勢は自動的に導かれると主張する。また，その主強勢の位置は従来予測可能とされてきたが，実は傾向に過ぎず，デンマーク語は語末から数えた３つの位置（末尾音節，次末音節，前次末音節）のどこかに主強勢がくる「３型アクセント体系」であるという新見解を打ち出している。

続く第４章は「音節量」を扱い，特に第２章で設定した音節構造を再考する。その結果，聞こえ度の配列の例外をなす/s/について，「音節周辺部」という概念を導入し「音節中核部」と区別することによって問題点の解消をはかっている。また，近年，諸言語に導入されている「モーラ」の概念を再検討し，デンマーク語にはそれが不要であると主張する。母音量についても，長母音は短母音が強勢を受けた結果として出現しているもので，音韻レベルでは設定しなくてよいとする。

第５章では，デンマーク語を特徴づける「stød」に焦点を当てて考察をし，強勢との相関から「声門化したストレスアクセント」であると位置付ける。これにより，強勢には，声門化したものと声門化しないものの２種類の区別があるという結論になった。

複合語を対象とした第６章では，「複合語アクセント規則」が注目される。前部要素の主強勢が全体の主強勢となり，後部要素の主強勢は全体の副次強勢となるという規則である。それに対して，stød の方は複合語においても元の形がそのまま保持されるとする。

形態論と韻律との関係（第７章）では，接辞の分類に特色がある。すなわち，語幹がもつ強勢に対して影響を与えないものと与えるものに分け，後者をさらに，強勢の位置を同じ語幹内で移動させるものと接辞そのものに移動させるものとに区別した点である。

第８章は頭文字語で，その強勢に文字数と親密度が関与するとする。最終章で全体をまとめる。

論文中には，副次強勢を音声レベルと位置付けながら，別の箇所では音韻レベルの規則の中で参照しているというような分析の揺れが一部に残り，また，stød をめぐる議論が冗長であるなど，改善すべき点はある。しかしながら，デンマーク語韻律論の主要なテーマを網羅し，どのテーマについても先行研究の問題点をきちんと踏まえた上で一次資料を集めて詳細な考察を行なっており，その結果出された新見解には，デンマーク語研究のみならず一般言語学の領域でも意義があると認められるものが少なくない。本審査委員会は，本論文を博士（文学）にふさわしいものと判断する。